

くすり博物館だより



〒483 岐阜県羽島郡川島町・内藤記念くすり博物館・Phone: 058689-3111

第13号



特別展

間中喜雄による

医の先人展

- 昭和59年4月3日～5月6日
- くすり博物館3階特別展示場

第85回日本医史学会総会は4月21・22日の両日、名古屋大学で開催されます。その記念行事の1つとして当館において表記特別展を開催することになりました。

間中喜雄先生は東洋医学の権威者としても知られ、その寸暇に絵筆をとっておられます。

今回の展覧会には古今東西の医学者蘭学者などの多彩な肖像画84点を出品していただきました。

開期が短いので、お見逃しのないようにご覧ください。



間中喜雄氏のプロフィール

明治44年生まれ。京都大学医学部卒。北里大学東洋医学研究所客員部長、昭和57年日本東洋医学会総会々頭。著書に「鍼灸入門講座」「鍼と灸」など多数ある。

現住所：小田原市南町3-2-31



解説（上から）

1. 愛知県立病院老烈外科手術図

ローレツ (1846~1883)

横人。外科学。解剖室を設置、実験動物を飼う。

2. ヘボン医師手術図

米国人ヘボン (1815~1911) は医師・宣教師として来日。横浜で開業のかたわら和英辞書「語林集成」を刊行。ヘボン式ローマ字を普及。手術を受けているのは歌舞伎の女形沢村田之助で、左足を切断し日本最初の義足を付け舞台に再起した。

3. 坪井信道 (1795~1845)

美濃国池田の出身。江戸で蘭学塾を開き多くの門弟を育成、緒方洪庵をも教授。





▲丹波康頼 (911~995)
隋唐時代の医書を調査、日本に現存する最古の医書「医心方」を著わす。



▲曲直瀬道三 (1507~1594)
足利学校で山代三喜に医学を学び、将軍義輝の知遇を得る。天皇家や信長、秀吉、家康らの治療に当る。



▲香月牛山 (1656~1740)
中津藩侍医。のち京都で開業、皇子の奇病を治癒させ高名をはせる。



▶岡本玄治 (1588~1647)
医家として名声高く家康に召され幕府医官となる。朝鮮国使が来日の折、両国の医術について論議し幕府の面目をほどこした。



▲山脇東洋 (1705~1762)
刑死人の解剖 (1754) を基に、わが国最初の解剖書「職志」を出版した (1759年)。



▲青木昆陽 (1698~1769)
大岡越前守に薩摩芋の試作を命じられ成功。西洋文明摂取のため蘭学の禁をゆるめるよう献策、以後蘭学が盛んとなる。



◀吉益東洞 (1702~1773)
京都で開業するも貧困を極めた折、山脇東洋と交り実力を認められて実証を重んじる古医方の雄となる。

◀賀川玄悦 (1700~1777)
産科医。鉗子を用いて胎児を取りあげる技法を考案。著書「産論」で胎児倒立説 (頭が下) を発表。



▲平賀源内 (1726~1779)
国学、蘭学、物産学、本草学を研究、エレキテル(摩擦起電機)を考案。江戸でたびたび物産会(博覧会)を開き、戯作にも没頭した。



▶本居宣長 (1730~1801)
伊勢松坂出身。小児科医開業のかたわら源氏物語など研究。「古事記伝」を著わす。



▲中神琴溪 (1742~1833)
京で開業後、各地を歴訪し医術を研修、半医半農の生活の中で多くの門弟を指導。



▲江馬蘭齋 (1746~1838)
美濃大垣の人。江戸で蘭医学を学び大垣藩医を勤め、蘭学塾を設け多くの門弟を育成。



▲本間玄調脱疽切断手術図



▲華岡青洲 (1759~1835)
トリカブトやチョウセンアサガオ等の薬草を配した麻酔剤「通仙散」を用い、1802年世界初の全身麻酔下で乳癌の手術を行なった。



▲海上随陽 (1759~1811)
稲村三伯とも。大槻玄沢に蘭学を学ぶ。わが国初の蘭和辞書「波留麻和解」(江戸ハルマ)を完成した。



▲高野長英 (1804~1850)
シーボルトの塾で学び諸科学に秀でる。幕府を批判し逃亡生活。



▲本間素軒 (1803~1872)
通称玄調。江戸、長崎に留学のち華岡青洲に医術を学ぶ。水戸藩侍医、藩校で医学を教授。



▲佐藤泰然 (1804~1872)
高野長英に蘭医学を学ぶ。順天堂塾を創設、門弟を育成した。



▲松本良順 (1831~1907)
佐藤泰然の次男、幕府医官の松本良甫の養子となる。蘭医学を修め、後陸軍々医の編成に尽力。



▲長与専斎 (1838~1902)
大坂に出て緒方洪庵に師事、長崎でポンペらに西洋医学を学ぶ。大村藩侍医、長崎医学校学頭。文部省医務局長など医事制度に貢献。



▲青山胤通 (1859~1917)
美濃国苗木出身。伝染病研究所長、癌研究会を創立。内科学の大家。



▲北里柴三郎 (1852~1931)
細菌学者。コッホに師事しペーリングとともに破傷風菌の純粋培養とその毒素を証明。血清療法を創始。伝染病研究所長、のち北里研究所を創設。

▲坪井仙太郎 (1861~1921)
岐阜県揖斐川町出身。酵素・蛋白化学の先達。ジアスターゼの創製。



▲小島三郎 (1888~1976)
岐阜県羽島郡川島町出身。国立子助衛生研究所長。公衆衛生に貢献大。

新収蔵資料

※池野成一郎関係資料

ソテツの精子を発見した植物学者池野博士の日記帳44冊と愛用の革製ポストンバッグ、撮影した風景写真数百葉が、当館に収蔵されました。ローマ字書きの「Zikken Idengaku」(実験遺伝学)を著わした池野らしく、日記は全てローマ字書きです。

とぴっくす

▶特別展「切手にみるくすりと健康」は昨年8月から11月まで開催、期間中は古川明氏(東京・医師)や伊藤隆介氏(東京)はじめ、各地から多くの蒐集家も来館。新聞やラジオでも賑わいが報道されました。

「明治29年6月22日、学術上取調べのため鹿児島へ出張」と記録されていますが、この年ソテツの精子を発見。また昭和3年の御前講話の原稿もこれらの資料中に含まれています。

※早川家旧蔵資料(戦中の医薬品)

華岡塾門下生・早川賢三(岐阜県関市)の子孫である千葉清子氏宅の土蔵を調査したところ、配給薬品と

▶植物園の改修 博物館側の樹木林を移動して見晴らしをよくし、マタタビ等の大アーチや散索の小径を整備しました。名札の書き換えも終了、一段と広々した「付属薬用植物園」の春をご覧になってください。

思われる苦味丁幾、ヒマシ油、葡萄糖注射、重そう一俵など数千点に及ぶ薬品が発見されました。美濃地区の薬品備蓄所でもあったのでしょうか、膨大な量の薬品です。同時に華岡塾の押印のある門人姓名録、手術用燭台など約100点も寄託されました。早川家については、博物館だより第10号でも既にお知らせしました。

▶パストゥール博物館(パリ)では2月まで特別展「ルーとカルメットの業績」を開催。ポスターと図録が送られてきました。

▶人事消息 退職 古田 恵子学芸員 採用 小山みか子 //